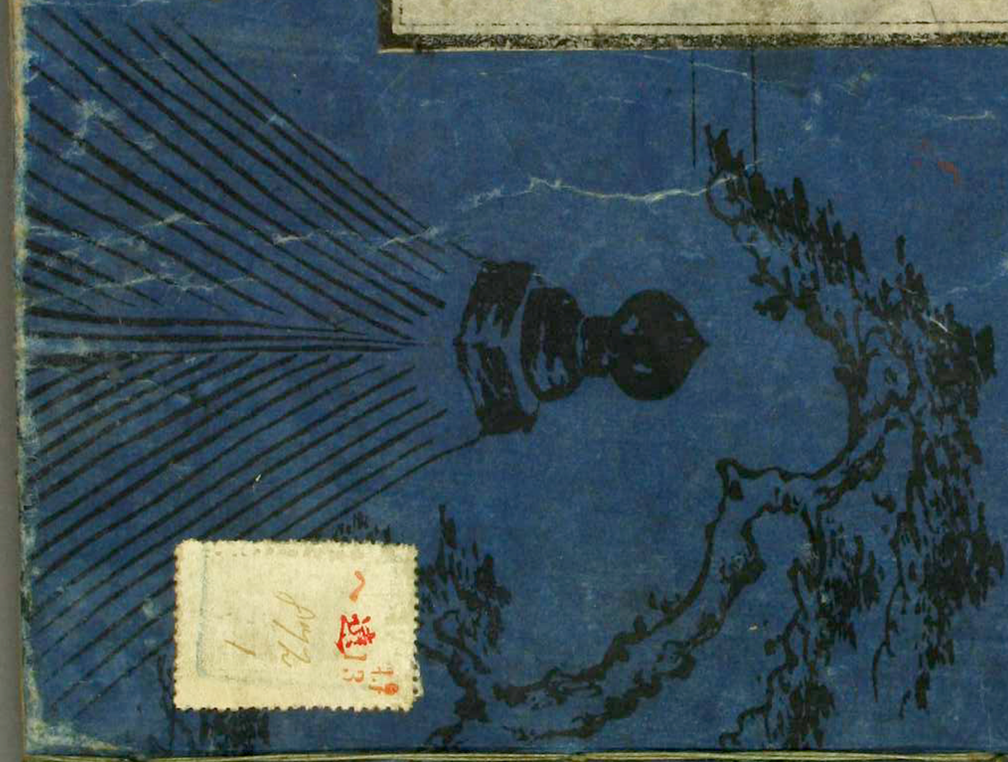
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

繪本如意玉

上



繪本合邦辻

門 ヘ 3
號 872
卷 1

繪本合邦辻序

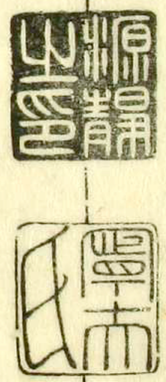
夫報父兄，雖因不易事也。昔時北藩有高橋氏者，捨生以報兄，雖其跡多尤，雖者鳥仇則其為仇邦君之同胞而屬主家之宗義

明治二十五年十月十日 購求

論其分則猶君臣較其勢
則不啻鄒魯然安之而不
疑投簪以冒必死之險其
去就之間正其誼而不謀
其功者有矣非剖腸披
丈夫孰能為之豈可不謂
尤雄者焉乎吾友其深憾
其傳之不廣使烈日之規
摸湮沒於是乎輯錄其本
末圖畫其形狀上梓以行
于世焉是舉也不唯欽遺
風而然蓋亦廉頑立懦之

激意也讀者其思旃文化

乙丑孟春源静序



繪本合邦辻惣図説

巻之壱

發端

小枝慶次郎寒中水風呂浴る図
小枝駿馬松風を鞭打て立退く図
小枝慶次郎漫行の話
囲碁の緒口絵抹泉寺と撲川図
美濃帝一振指紋帝一て活動よ入る図
小枝勇武の話
大字の指物を將を弩る図
高橋清右衛門小枝が純城を守る話
美濃帝一妻城を捨ふ逃る図

巻之弐

大膳亮及暴惡の話

小枝大猪亮及孔明の図

其二

小枝大猪亮及玄蕃の図

其二

玄蕃清左衛門直言の話

玄蕃清左衛門大猪亮及同善の図

玄蕃農民を縛る図

小枝敏起公玄蕃に問命の話

玄蕃大長寺丸を召て問ふと迷ふ話

大猪亮及遊弁に玄蕃紙避る図

巻之三

小枝敏高玄蕃を怒の話

小枝敏通公敏玄蕃に紙を織の図

小枝敏玄通信の孤士を責殺の図

農民孤士を縛死の話

孤士を責小歳の図

乗侯市丸玄蕃に孤士を殺して紙を奪の図

孤士を責て横死の話

孤士を責て横死の話

お幡山中にて乗市丸に遇の話

お幡山中にて雑紙を漕の図

玄蕃清左衛門の断の話

雑毒人魚小幸丸斬くお幡を殺す人図

巻之四

奥殿宗右馬ツ出奔の話

宗右馬ツ霧小風絞を焚く図

高橋九郎兵衛お幡を強姦する話

高橋計く犯人を捕す図

高橋昭智の図

高橋仁智疑獄を断ずる話

雲中小紀厳弘城出る図

高橋清左衛ツ樵紀の話

大猪雷度高橋清左衛ツを刺す図

小鴻孫三郎初後の図

巻之五

大長寺老僧敏高弘魂云誠話

農民高橋ツ紀と笑ふる図

高橋作左衛ツ高津沢く抱らく話

高橋作左衛ツ敏種云小結ふる図

高橋無妻の中元弘遠ふ話

治士弓婦女子ふ戯ふる図

西尾義人弟子の強弱を抜く図

縁金小おく作左衛ツ西義弘感ずる話

高橋作左衛ツ義中小兄の霊小見る図

永徒条八大長ものの密事と探る話

羽田条八叔母小多ふ図

巻之六

ある橋姫左衛門報雄の志を示す話
姫左衛門病く家に籠る図
ある橋姫左衛門虚病を構へて藻倉を退く話
敏経公怒りて橋姫を対小せんと仕ふる図
ある橋幸関氏を退く図
髑髏大長寺城中を窺ふ話
髑髏風夜丑刻大猪を見る図
若狭の小民途中にて石を拾ふ話
張民山中小石を得る図
農民羅網水海魚のある所を伺ふ図

巻之七

淫祠霊異を成すの話
玉垂奚神人水沢を法る図
髑髏山中に宿して邪神を試す話
販婦客處女を奪ふ図
お女賛水偏ら死く図
村人髑髏小沢に形魅を殺す話
髑髏邪霊を斬て小女を助る図
村民髑髏を取て墨図
村民洞口に狐狸を殺す図
肥州の處士田代が来歴の話
田代私婦の陰情を憎む話
冨田幸沢郎見代女丹慈墓の図

巻之八

田代忍び女を殺んや強く難ず遭ふ話

永冨氏が妻女生を祈ふ強く樒花を引く図

其二

田代弥左衛門永冨氏の殉路を開く図

隠士田代丹兎翁の法を授る話

田代百生成敵しく蛮を伐る話

老翁の教みよりて田代法を引く図

田代母を害せんとする図

其二

巻之九

高橋鬼貫鬼浪華へ赴く話

鬼貫河堤より月を賞する図

蒲生の墓所に農民怪物試る図

鬼貫怪婦を捕ふる図

合邦辻にて高橋田代を殺す話

摂州合邦辻の図

廻国田代盗賊の難に遇ふ図

高橋柳ヶ瀬より足を留る話

鬼貫柳ヶ瀬にて業八に遇ふ図

巻之十

小枝敏高里見若君へ忠幸成就する話

小枝大膳定成里見若君へ金成賜ふ図

松が枝自ら折る図

星見善右敏之丞祇園を去る話

柳ヶ瀬藤間見付て閻王の像と建る図

小枝敏之丞閑居紙免れの話

歩の率閻魔堂小休く藤間見ふ遇へ図

高橋藤間見大長もの勅諚と称る話

藤間見見の難云を報ずる図

其二

高橋藤間見幸意紙逐ふ話

藤間見命と捨て意紙全へ去る図

繪本合邦辻卷之壹

目録

發端

小枝慶次郎寒中水風呂紙没ふ事

小枝駿馬松風ふ鞭ち て立返く事

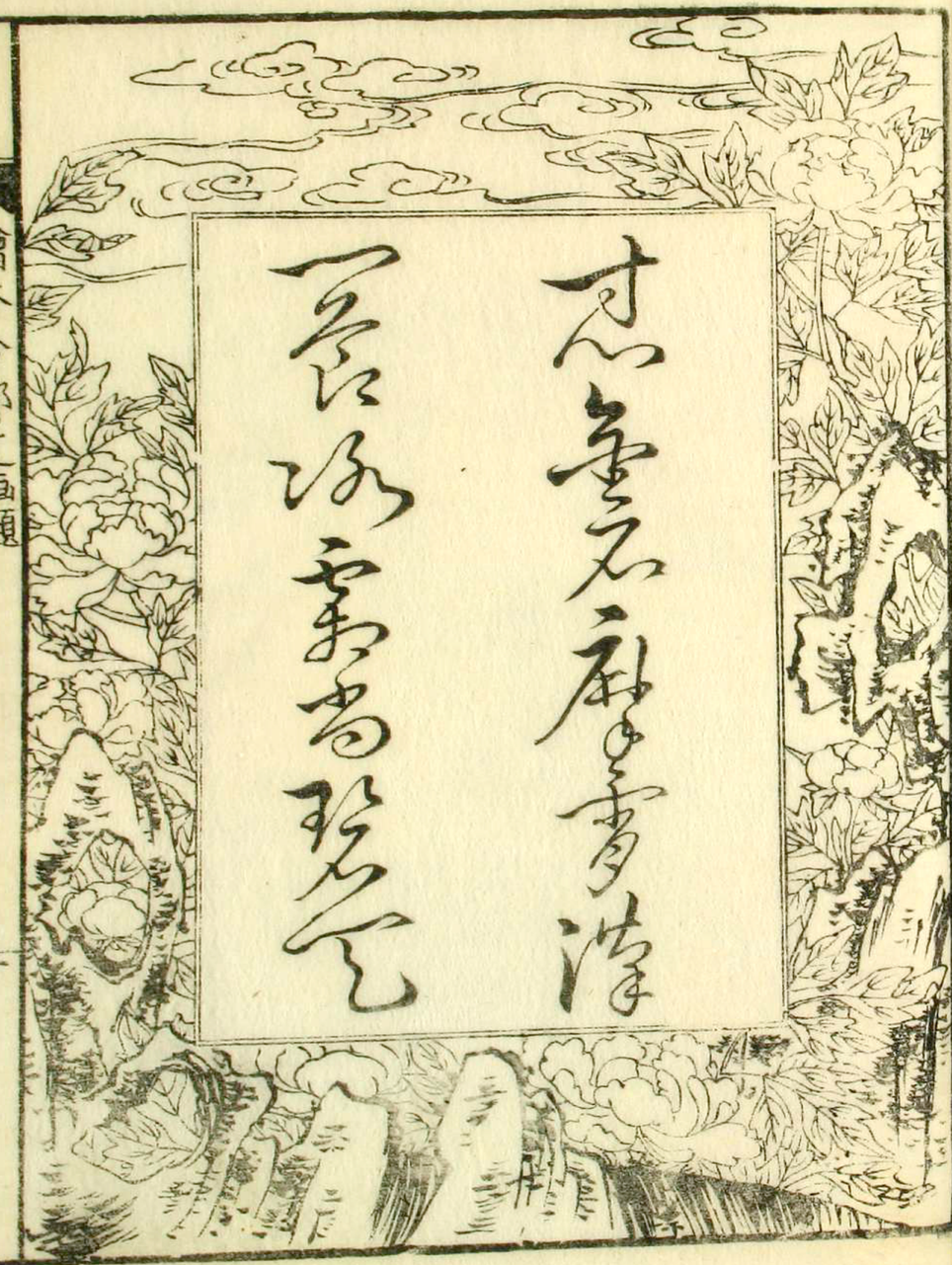
小枝慶次郎湯行の話

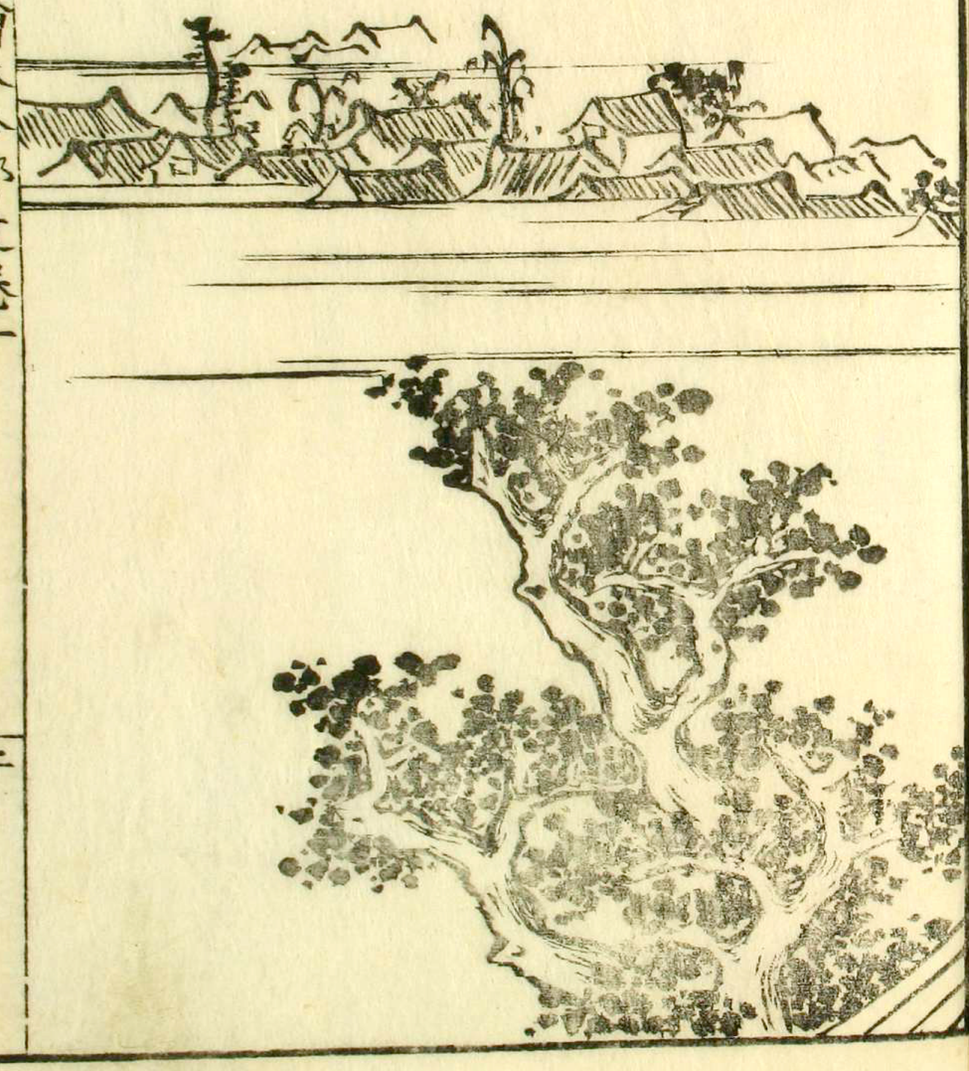
園碁の賭帰後林泉寺紙撲ひ事

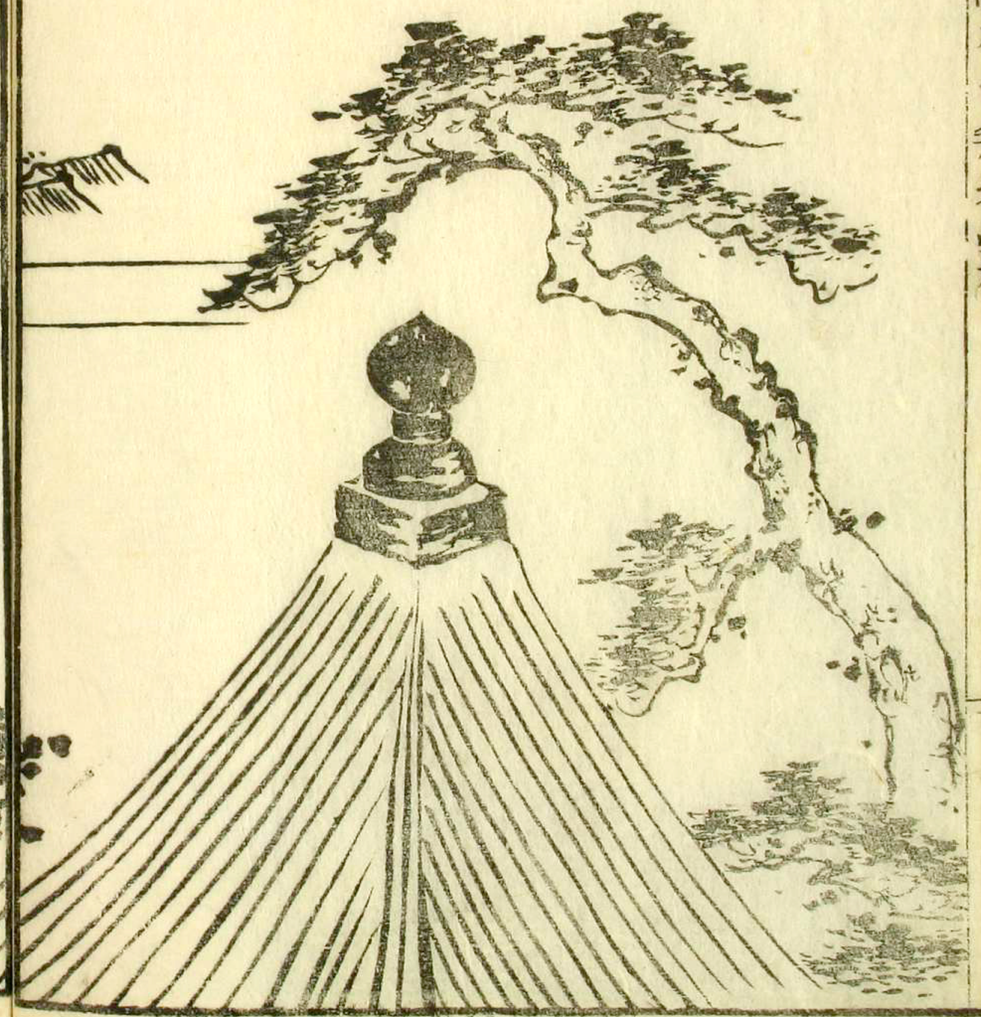
愛次郎昭指を常して活宝ふ入ふ事

小枝勇武の話

大字は指物法將を勤る仁器
宮橋清左衛門小枝ゞ託状受法語
慶次郎妻城宮橋より送る書



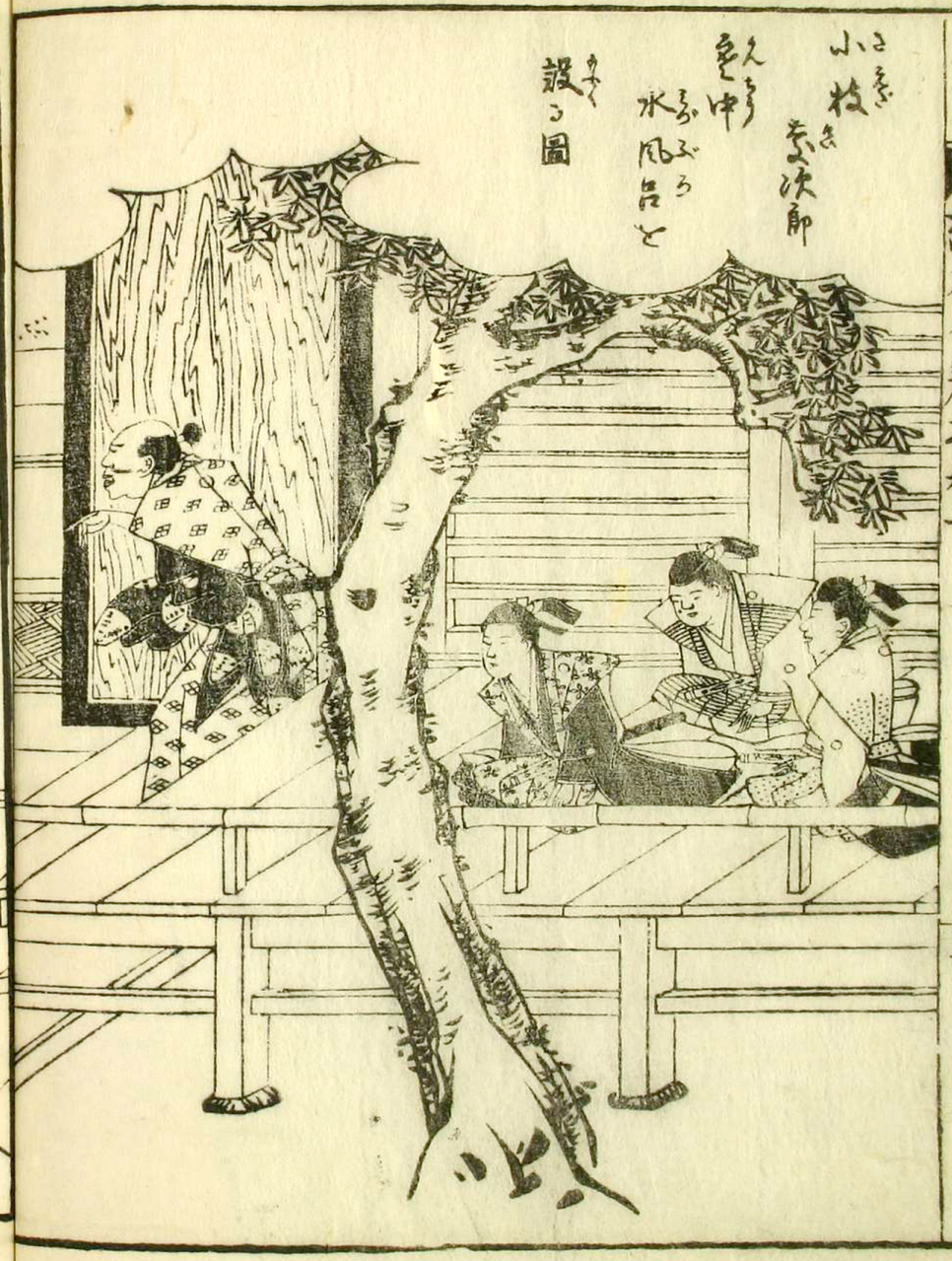




繪本合邦辻巻之壹

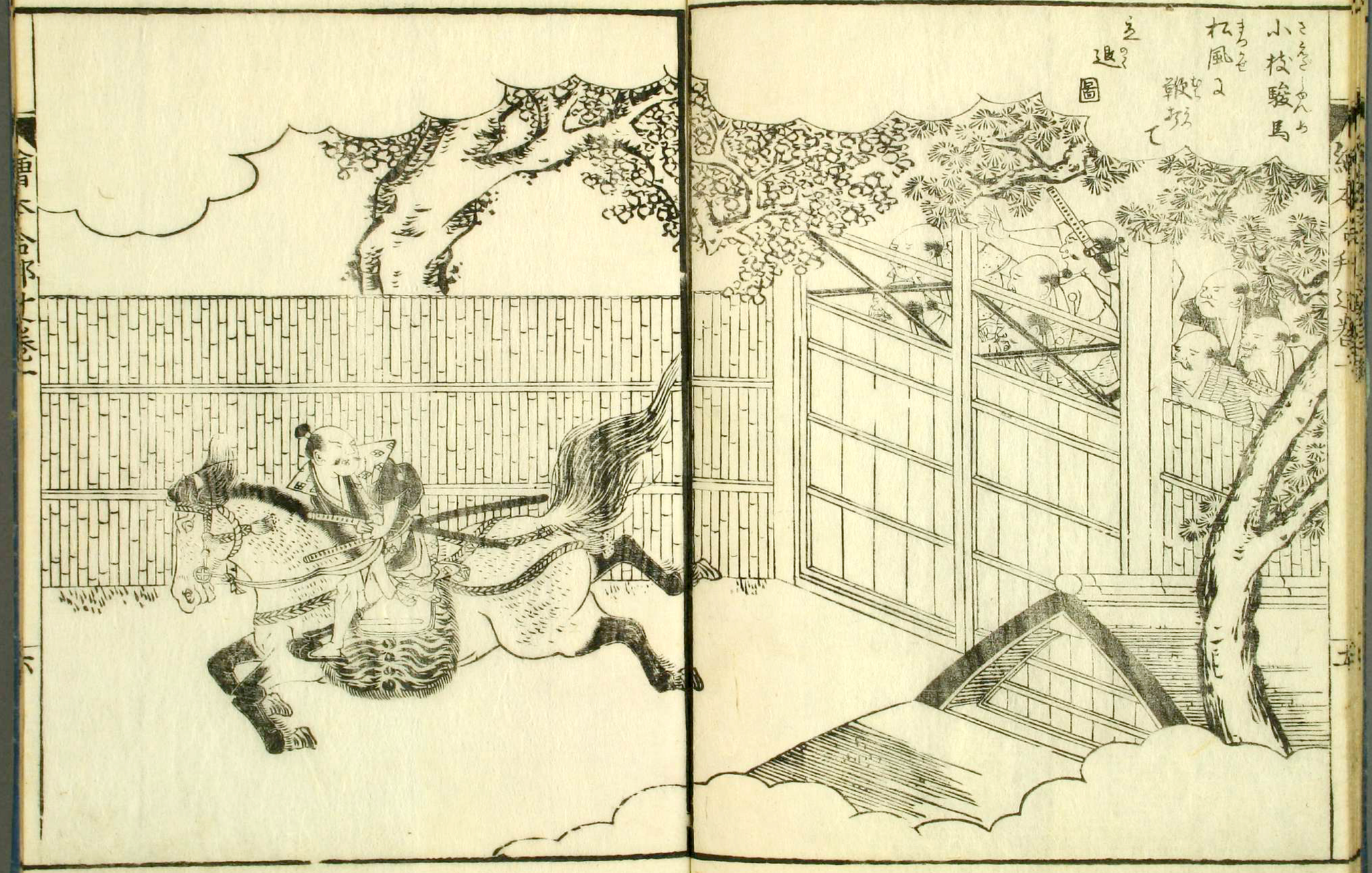
發端

往昔漢の武帝の時東方生あり博聞強智の才を藏て僅に執戟郎となれ共才を以て心を富貴に累さず故に人以て狂なりとす東方生答て曰古の人世に隱山蒿廬の下に居て我が名を庭金馬門に聞るりとく容難一編を作て真志を述し例あり我名の世に聞ん永の須臾の士に小技慶次郎敏秦と云者あり文に絶倫百家に涉り事乃亂秦に長じ武あるに源氏伴勢の物語を講じ勇畧武伎に秀て其性の長ずる所に深く勇名一時に擅なり然ども爵祿孔榮を忘れとせども行を不羈にして遂に人に抑せり其行幸乃大畧を弱るに初加越の狂極小技亞相敏秦卿に仕へ牧先登踏陳の功あり敏秦卿其勇壯を稱し近日姓の族籍に系るを以蒙土の封爵を與へ家僕の事を預ず嬌慢なる行をなせば一郡一邑の人民とも行ふを怪び民を治る法嚴畧なるを怨て敏秦を御前に召て物を改め爵を怪べ事を深く教示のひしに敏秦次に源く前非を悔向後を潔ぎ中者し敏秦卿所領限なく移く秦地又千石を賜の命あり敏秦次に寒に臨て世多の欲をなす秦もなし秦今許多の祿を受て食は山海の珍味を傳る衣は食布は腹に満るまで身に綾羅を纏衣色亮満とも飽とする事は色を求


小枝
太次郎
久米
邑中
水風呂と
設る圖

淺暑を延の用に備るのこころより絞る色がねる匠くしして細
行を薄仙を縮身を換んハ不謂不平柔のねる膝を屈るとなんぞ
異らん封禄を捨て他邦に走れる遠行事をねるとて生を
るゝ志とを見を定るゞ又ゝひるるハ素禄を捨て歯不
と立退バ後悔ならぐこと弱因しゝ寡なる立臣も会るまじ放て城
去るの名強る真ある挙動を良しく走るべしと上まを臣望日
早く出仕しく敏泉の前るおゝ素不肖なしく情慢る界
境る教奉を立り教く御恵る怜ゝ沈着発るのこころ良臣
今抜群の封禄を賜るハ憚多も族籍の端を汚を忝くの良
臠と行る猿しく難有に向後ハ修る縦ひ万々を撞一下によろく
今日ハ洪恩の第一を弟ゞまるべきねる莫強て兼茶敢ゞ後

に間密る御光陰を孔まりにくとこゝ見まバ敏泉ハ素る決らが
縱来の教迷る変基薄密源こと挙動をゝ大る収るひ清る
洗ひ茶含る社ゞと絞あり年ハ素る決ゝ仕流らうと泉る地
茶立法のごく反結ひる兼く例垂る松風と居ゝ猿るに
鞍と立後門の色る陰垂敏泉にの光智を結々るる六刻限
るも素くハ敏泉にお の護衛るて素る決らが邸る入るひ素内
る国て結合るのるハを結の面くハ結合の後る弁賞の極端る拙ら器
有て素る決ゝ礼服と他出迂く茶立る清ゞくこそ良きりて後
るハ今日の色こ氣義くるハ風呂の用こハ垂るた湯風呂と下
付垂に間清入拵さるゞと素る決ゝ先る達く落室るこの湯
風呂ること垂入一限加減よくいと下ゞハ敏泉にの如く裸身


小枝駿馬
松風之
敵坂
を退く
圖

るるりのひ湯風呂の中へざぶと入るべ伝ぞ平人湯はあるぞ冷
水之寒氣つよきよ冷水よ入るるまへ一身急ち冷ぶじ
敵家に大よ驚のひ其徒者ゑ近さるると寵へ内巻ゑ法べ仕流し
うりと後門へ走お外より錠をちつうとしめ塞ぎ来るれ風と云
迷物よ却家く別方知ぶ之巨うりを暗の面く巻ゑ法べを通て
とゑども後門へ狭しうり大よ周章ふさめきあうく且て外面紙
出東西よ逃ひ南北よ捜とゑたつねよ別方をれば空く社へ向う

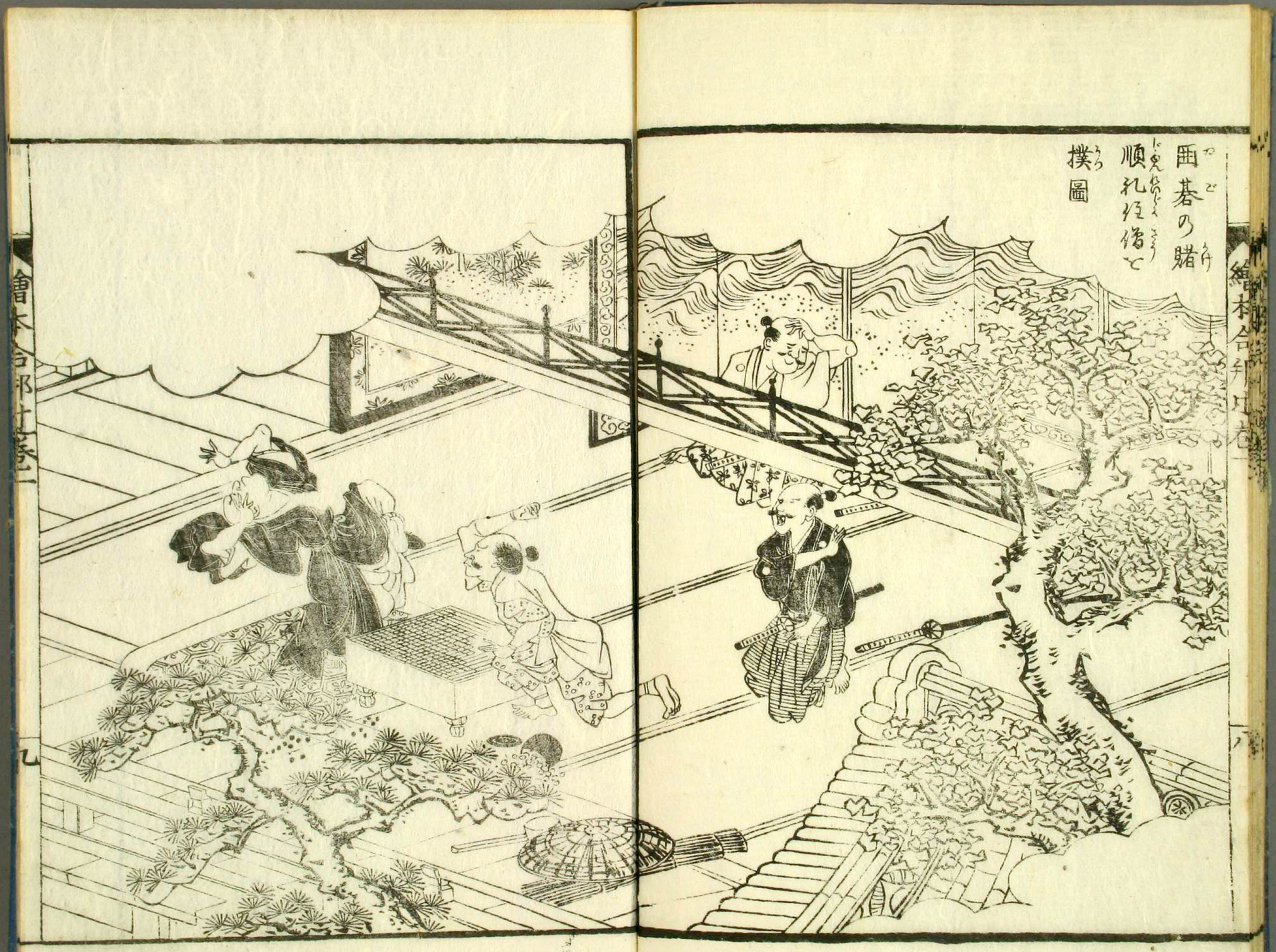
小枝巻法即浸別の話

部流小枝巻法へ敵家にと駆く本國を之出奥次舎法の
士青江山城守を託く別間を凌ぐ技助を乞青江巻く巻ゑ
法べぶ武名を奮ひ大よ抜ひ一滅よも及ぶ而引し家よ留く

技助と及しうりをこび巻ゑ法べ今へ志を達うとゑ武の道を始と
しく和ぶ孔舞遊藝に到るまて仏の欲する伝く弄し孫よ舎
法の諸士之逆を百および吏を求るるのおろぶ其中よも青江
ぶ紙下の士之法野茂之来巻田森右衛門伴伝英弥太右衛門
等へ南家よおゆく技羅の勇士ると巻ゑ法べぶ武之男巨爵禄
と求さる巻家よ伝しあよ青江ぶ部よ来く巻ゑ法べと接うを
奪ぶ百側の人を殺しわろ南家の菩提石林泉寺の住僧
清用おろく出来ぶ青江叮嚀よ懇接恭敬と及しる城之
法野伴伝英等伝ひ人来巻名ゑ坊主狂僧をの良紙中紙
林泉寺へ巻の内依ると沿く矢石汗馬の功ゑく能まで嗜ひ
暇よ設て人と出下面貌来ぶ伝ゑ一撃南とさきのくと号るを

そなたの所望にて是ゝ名加徳情び囲碁うち好系代て彼ら面と対ん
是ゝ名の日林泉ちよ彩さく素ぐよ色をえろべしと云さまこそ
皆く不審よいろと兼く漫彩よハ切とゆ〜そなたの必定術
あらべしと約と定く之別望日よ色く伊徒美之津野の二人
林泉ちと訪ひ口方山の囲碁〜く小枝ぐ術必伝と結番う彩
て そなたへ仮東順孔の客よやつ〜林泉ちのを色と縁細せ
しぐ伊徒美之津野ぐちよ入〜と色よ〜く付分ハよ〜と林
泉ちの庫裏よ入を囲の吹れよてひぐ南御ちのれ色の事
兼く承りおよびいけ役不回も南地よ系り以べ囲え一の古参
よ一役物見仕役ちよてい行乗清浄下さるべしと云入〜ハ伊
徒和者よ若〜く千栽の小門と帰さて そなたと誘ひ〜ぐ

そなたの入よ呼び飛山唐沈の伊徒と涼く紫入腰中の砥石出〜
て入絶の碁一首と作り伊徒とあろく和ちよ是しまべわちえて
大よ数じ そなたと係先よ打く囲碁と問石付のちゆ仕と称〜
和韵の碁一首と作く与人有合巣子菜と絶ちも諸囲の美
事と問碁〜伊徒美之津野の二十八そなたの碁〜ぐ之系の美しやう
ちをよ〜く矣と催そとと人ども曽て色よもおさべ所嘲と答
で其石ねと伺ひちよそなたの碁〜立〜ちるまべが侯結の間
と伺ひ遍歴の内囲碁のちよ出今〜結とち〜石砥責合
のよ陸まで実〜やうよ述々是べ山和ち性質棋局と好〜うぞ
真決結とて真よ入ゆ行ちよべ是下も伊徒のちよと之えく
う試よ一局囲べしとちべそなたの碁〜ぐも辞せべ云べ数よち


囲碁の賭
順礼行者と
撲圖
繪本合邦十五卷之一

るべしと碁盤を敷ひ私義無辭をよく賭をしてそ十分
のを除出ずごとく二三るも力劣いたありてハれ願も落ひくを指
竹篦をて面城撲を賭と仕べしと清を是べ和者を恐も角もと
若て好く局と下しるを若し故と負くく和者を敷ひ繋
約のごとく指竹篦を齒をくと顔と差出せば和者以を揮を下
の色を仕せ仮を賭へしぬをどお家の舟をてくを痛る法を
おくるもはしまるうと辭しるを若し強て清しようと
和者止事をねぎ拒く瓜彈と齒ろう角二局をよく若し
若色と是しく雖をく打賭しうば和者を竹篦を清るを
若し法し仮て若を是し体ををく良し私義無辭ありて仮を賭へ
仕をとも法僧へ竹篦と齒いんへ以舟と傷をねぐく後世の罪

恐しくいと依ハれ免下さるべしと辭せば和者許さじ貪欲脫り
是下とおを是べ今是下の竹篦ををざる仕理を是足推べし
と頼とおを是べ若し法たいで許おを是しを法振拳を堅て服
鼻の間と殴る事おを是をうを大力を歩を是しるを是べ和者あり
と叫で例る間を若し法しいも内を是あく行方ををりうをき
体徒美を体野者和者と痛好く者を辭しく途中を出る
と慶法鼻結を是て今日のを是へ如を云べ体徒美を法
野を美ひ俗を強仕方るうと共を一矢を催しる真後青仁
山妹守を用をようて縁金を赴るありしを若し法しも体ひく
婚縁金を逆陶日く渚方を猶出して法を真を是るを青
ひを旅館の濤を沙湯あり若し法し旅行の西を必を是おく

浴湯せう一日仕事のさまを六人連てお茶う入色の中とも云べ
挑灯しゑの武男の侍せ〜とうく茶を次〜例の祝おくり
悪ごとのたぐひる云代宮くお〜べ戯弄んと真用云と思日く
何人るまを五日の後又お連くお事をるを生命〜べ忘くユ〜
ぬく下帯を脇元を佩彼士の者をお通真作て湯紙を入け
まべ彼士者を足をまくく徒者ぐ脇元を佩るぐ〜汚を入るで
ひ方をも汚なくてい付をと皆脇元を佩て湯を入まべ茶を
次〜ハ茶孤長汚と色彼士ホぐ板間をよりるとまくく絞く汚
紙をおまを帯を美脚くく脇元〜ををまべ彼士ホ磨て身接へ
まるを元来茶次〜ハ竹箆を仕ひ毛まべ静〜と接離〜足の
裏の垢を刺〜り彼士ホ足体をまくく大をあくまを徒茶を欲を

石を汗をくせさび磨り柄も下緒をたりとはぐやを潜
る脇元を携帯りを含ぐを汚をまべ茶次〜を旗宿を汚て出り
を汚り落く真とを使しる

小枝茶次郎勇武の話

彰て茶次〜ハ青江山城守ぐ技助を清舎ほを立て茶月を
送る茶に拙枝藤勝瀧国形州の住を野上義照と寵執り
子細あり て植枝茶より青江山株をを大ねとして軍勢試
形肌へおし聖上家と戦茶の度あり真指を為て青江茶次
郎と藤勝を進しくべ藤勝元来茶次〜ぐ武勇ハ聞及を人
而るまべ今瀧国と兵を攝る時を為て一騎当千の壮士とは
んハ茶ぐ石を云をりと云時を石出を来世を云石をりて

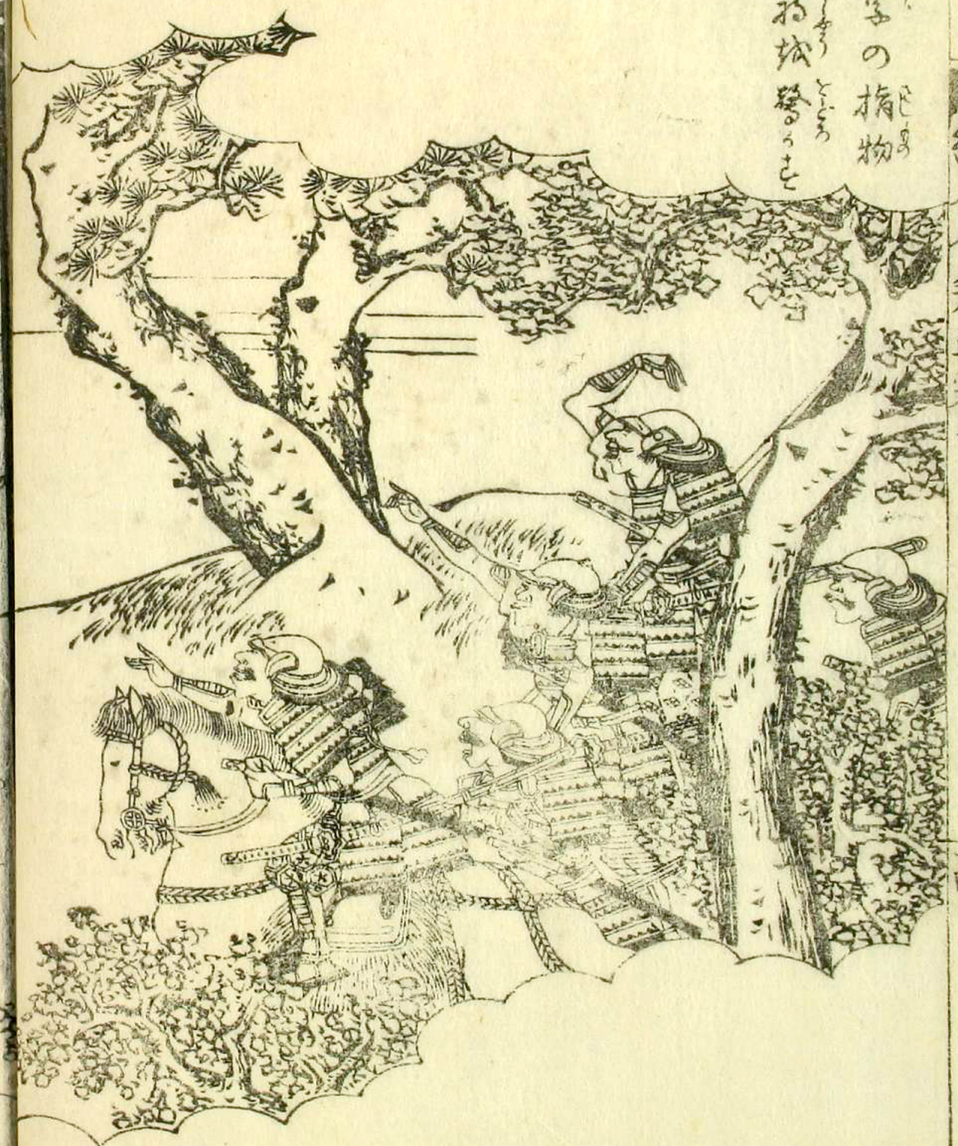
慶次郎
脇指
入る
図

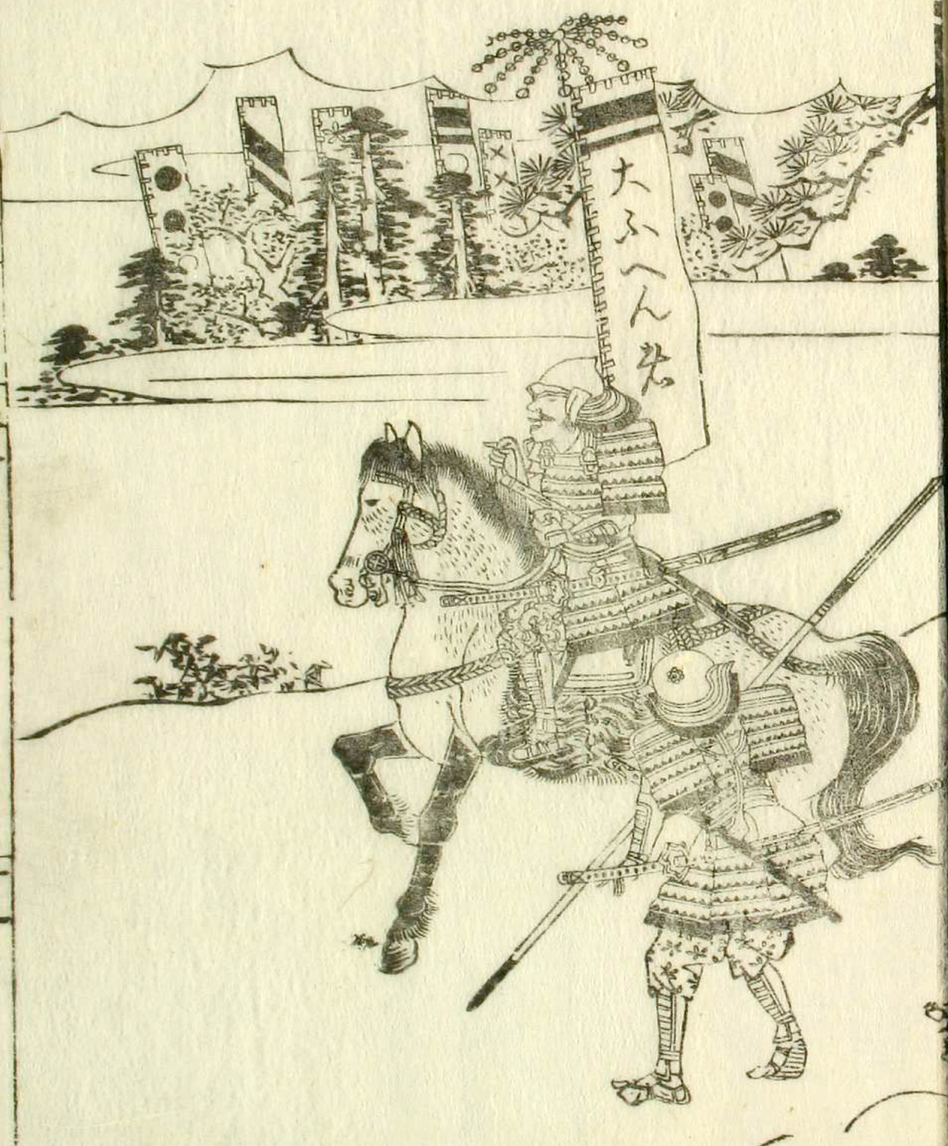
石抱らるべき有様あり、なんぞ其次第を尋ひ、今
仰の趣難有奉畏い、然るべく私南御国へ参りは次第、青江
山城守へ、なるべく下立に候よし、兵今作家にて、孫と頂戴
に奉る仕る、面あるよいで、本国より面故主敏家より仕へ下はるども
面あり、て本国を立退き上へ再び孫位の重を以、俗に浪人
ト上れ、左人の食と、俗ものハ人の長より面ること、是通よりて、私
義本国を出しより、青江山城守、技助よりて義、命を繋ぎ、時
より面御家の孫と、もはしり、理なるべ報恩の為、今孫以
に進一膳の力と、助せるべき間、何の、なくもれ、なくとも、
若しべ、義勝、其志の勇壮なる、仲孫の、なるく、
為分と、しく、青江なるよ、属せ、と武具馬具と、揚ひて、

那進、発の軍中より、加藤、引く、軍議、し、法軍、舎法と、押
出、て、より、黒革、威の、具、より、猩、紙の、陣羽織、と、義し
留、士方の、曹、とて、ぐ、さ、十、文字の、徐、と、楼、黒の、野、髪、る
より、歩、猪、指物、白練の、口、本、より、大、武、者、と、ゆ、るより、て、大、文字
に、書、付、青江、ぐ、の、夫、先、より、ぐ、押出せば、天晴の武者、振
るり、と、ぬ、ぜ、る、の、り、り、より、渚、の、大将分、義、より、が、指物、紙
より、ぐ、義、は、世、より、同、し、武勇の、家、より、こ、の、今、軍、より、従、法、夫
在、汗、馬の、芳、と、作、ぐ、勇猛、を、那、ざ、る、は、し、義、より、他、家、より、の、武
勇、は、危、も、あ、ま、南、れ、て、赤、真勇、を、那、さ、ど、去、る、より、め、彩、傍、義、亜
人の、振、舞、仏、ぬ、ど、し、と、青江、ぐ、方、へ、云、ま、ま、べ、青江、ぐ、と、も、と、仏、付
軍、法、と、犯、て、義、より、義、と、告、指、物、を、改、む、ぐ、さ、は、し、義、せ、れ、べ

来る馬をも止め大よ矢辺鄙よ生し人くうまゝ俄名ばうひ
の清濁だよ多りのうちてと芝四郎系浪人よて金狼の者とて
もなく清ゐ人よ住まゝ大不弁共と云ゆうりと云る事よ
言軍仮内て武有を告しゑ青江も拾方るくて打捨ゑ
彩く青江山城守清軍と引率し」ゑ弟上方にも
兼てよ配を定義照の本城及び長谷と根城と真鍋十郎ケ
の出城よも軍勢を繞て防戦し故味方負とも絶を攻戦
極よ双方の死人数千と云数を知ずたゝ共も拙敗ハ武田
ゐる家ゐまゝ清和士卒の勇猛激しく十日外の内よ弟上の出
城数多系取しゑ弟上勢ハ本城長谷上の山谷境の又城へ発
ゆ者も防戦守禦を厳密はして結そうゐ是よ於く青江法

師と集し軍議を定先長谷へ取ゑんと軍をそゝく長谷の城よ
対ひく陣とゑ一伯の勢と出しゝ外城ゑ城兵ゑとゑ
るより切て出外城の勢と引色一人も洩ゑとを合しゑ拙敗
勢ゑハ寄ゑ大軍よ囲まゝくゆる事とゆゑ次よの面くゆ体
とんをく思ひくよ軍勢と操出し味方と敗人と大と奮しく
戦ひゑゑハ城兵も退くよ切てゐ死よるりて搦合しゑ曾て勝
負の色ゑ人ゑ彩くゆ果べくとも又人ゑ青江山城ちゆ者
と雪て大よ寄り扶原を法て味方人数と引揚て陽らゝ兵ゑ一
中泉ゑ水紙下の土拾殿外と流へて出来り先よ進しゝ法士の内
よハ集が紙下多ゑハ系系りて引揚ゆうくゝの青江ゑくゝハ早くよ
引揚系ゑくゝと浮ゑ一ハ中泉ゑ山ゆゆくゝ後引揚て系出せ


大字の指物
諸和城攻るうを
圖


大ふへん先

しが組下の士大高七左衛門と云ふ者ハ隊将のごとく殿陣に
臨ミ人事然るべからずとて素肌丸腰て引揚るべしと中泉をおし擒
て既に中泉も続く既に引揚んとせしが城中の新手入替
折て出喰付く戦ハ中泉退りあくしがまた見えにて數と引
受大高七左衛門諸太に鉄死を此時小枝黄治郎伊佐見孫
三左衛門藤田森右衛門菱沼日向守石田与三郎三津野森右
衛門等二十騎斗青江が陣と離れ城下の戦と見物せしが味方
難儀におよび隊を中泉も戦死の体に見へしかバ黄治郎大
声と揚まねの合図しけれども味方の離義とて捨べからず也
出来得く殺んと一番に既に出せバ見えむと二十騎斗の勇士続
て乗出し敵ぞする城兵の中へまた一文字に切入縦横に走る

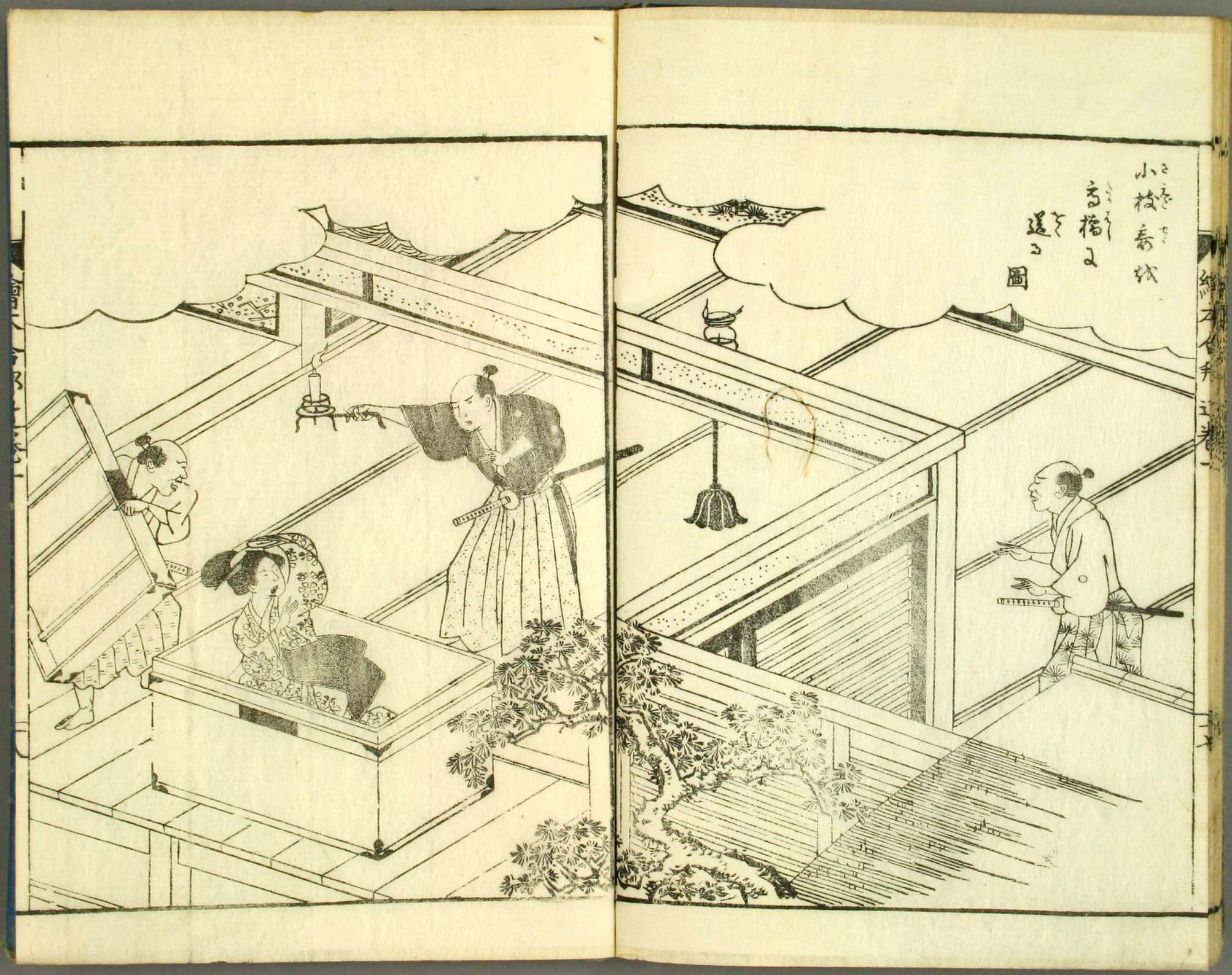
騎馬武者三十騎斗突落しけれバ城兵此勢に畏てやしり引
退城小枝伊佐見等付入にせんと諸軍を下知して進しかバ
城兵叶ずとや思ひけん忽ち城中に引入しかバ極楽勢も続て進
バ静くと引れけり小枝菱沼伊佐見等何れも手痛く働し
かバ残ハ実検右刀ハさらのごとく鎧冑にハ数十の矢をおうけ
中泉が陣おも包る時黄治郎陣中を見入まねの死を余所
に見く殺ハどき此体にハ大高七左衛門のか一人も男ハ死しとみえける
ぞと思ハきまれバ中泉が組下の諸士皆赤面とぞしたる其後
数日の合戦に手に勝敗ありて未勝負決せざる一日に抜おりて
落勝より両陣を催しかバ青江羽扇の軍勢と引揚て本国へ帰
陣せり此時も聖上勢只管付募ひて味方難義に及んとせし

と青江後陳よ絵（欽と引離て雖なく引れとり紙中小枝を汝
郎殺せし功多しとの人ども敵膽の行状よ与汝と為長を
ゆつく行よ畧ス

高橋清右衛門小枝ぐ託状を受る話

彰く青江山城守軍勢を引揚て舎弟よ西陳し那及戦功
の次第を一述しゑば義勝諸於の功労を賞せ玉ひ紙中小枝
を次〻ぐ挙勧同しよ勝る武勇の誉りとく再び紙縁を
賜ふべきの命ありとの人ども為を次〻初の志をちく従へぐれぞ
意よ因く青江ぐ方へ就垂玉を次〻枝助の料として山城ちく
千石の加恩あり〻ゑば為を次〻義勝ぐ恩遇よ与し平素い敵
膽漫行と次よとると雖紙功衆禦のゆあるべ必ちぐひて功

と立所初己の恩よ報ぐる行く奉と為く顔永代奉
為次〻又拾案よ及び玉べ義勝奉来の功労と謝せられ義
倉郎中よおゆく蒼宅と賜ひ結妻妾僕と添く紙生と言
しめひ玉べ為次〻毫より強金よ移て紙業友と豪く
又雅と読く風月と弄んぐ世俗の礼節と著くくんの作よぞ
行なる行よ紙中防波の妹を小枝侍中守度の家士る橋清
右衛門とのるとの孫倉立番と勤しぐ壮案附為次〻と行
金の友ゆりしよ為次〻恩をの後嘉猶しぐ此段抜扶衆
の郎よ移て紙よし紙同復び義変と結びくるよ義永代一
奉よ勤く立書の但海内国ちるとく為次〻方へ来りゆる
発憤よ入し身ゆ玉べ再舎紙しぐとと紙日侯信し補附と


小枝喬城
高楷之
遣る圖

及んで之四人とせしゝび巻の次第醤と留系本國と巴しよう
逝世の志あると仮柱板家の主ともくども緑と変ぞ只僅の
仇偶と先るを捨として修の物と蕾の身は今已の志続り
入ることべ配偶もをるまじしこの人べ義絡よう湯〜武をる異
のあの八微細の示も人の点をし配後の潔ようくんの身と評し示
に代後不図も一の変とはうう変うの人にふんも本変のあゝび
の配後商家の孫孟んの志の身は肯見と破却せんの流石人情の
あゝび仮の山と仮足下の祝るの間頼くの見下國の指図の仕
び家の変化し示の商ゝび家の代て破却ちゞしとをれば
る指図て足下と素の形全のあるゝび義のようくの一命と
も稱せを況や一命と扱らるの行ぞ稱をゞを出の指図

だしと云ゝゝび慶次郎大の恢ひ系が生茶の委託郎の
陰謝をるの何の〜拙〜も子細あつく今の扱ゝし今系見
う指せやゝゝことゝゝべる指急も角もとく別を告富西
の何つゝく指るの其衆二の及で一揮の長指の書簡城
浪人繋約の一示ををるの〜し云就〜しゝゝべる指変ゝく一間の
入窓の開の人るの宮墓の八あつで今日巻次〜が方に有し
二指半の指押ゝゝべる指大の警ゝ見塁く騏驥も志ぬゝ
べ警馬の芳流石の巻次郎も志風〜一婦人と捨ゝく系
の泥をる幸云沈は形の返返〜く眼を見ゝ世人と号
ゝゝ巻指押魚の押為小枝表金く妻と情のあゝず
我邂逅枝席の指〜く不図も脈と変今已の八尺の及べ

ものといひうるべき指大夫悦ひ渠が流と養ふへ国系種面へ
然る城明らゑ云ば歎ひく系と想らせしゑ側の浸行今に
ゑゑく止ざと矣壺ゑ入ひうへ仮ゑ系ぶ妻と被嘉し生生
の児を養育しく英雄の徴と務ゑ人ゑ大ゑ嫁び給畔と結
ひて國ゑ為を孤ゑく男ゑ生生せしゑ已が二男としく
養育ひう芝浪ゑ翁兒ゑへは芝浪が子ゑりゑを

繪本合邦辻巻之壹畢